

131

2020 WINTER

美術館NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 2

浦上玉堂《山澗読易図》(部分)

江戸時代後期(19世紀初期)

紙本墨画淡彩

168.1×92.4cm



岡山県立美術館

OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

マイセン動物園展

福富 幸(学芸課長)

「マイセン展」を一緒にやらない?と旧知の岩井さん(パナソニック汐留美術館)から声を掛けていただいた時、真っ先に頭に浮かんだのは映画「マイセンの幻影」(監督ジュルジュ・シュルイツァー、1992年、英・伊・独合作)でした。改めて調べてみると四半世紀以上も前だったかと月日の早さに愕然としますが、東京の小さな映画館で見たことを覚えています。磁器のフィギュアという日本ではあまりなじみがないものの、白く輝く肌をもつ愛らしい人形が光の中にキラキラと碎け散る様がなんと儂く美しかったことか。マイセンというブランドは知っていてもその実を知らない私にとって、マイセンと言えばこの映画でした。(ご興味のある方はぜひご覧ください。)

17世紀以降、東洋の文物がヨーロッパに輸入されると、中国の景德鎮や日本の伊万里は「白い金」と呼ばれるほど王侯貴族たちの垂涎的となりました。東洋の磁器に魅了され、ヨーロッパでの製造を目指したアウグスト強王(ザクセン選帝候・ポーランド国王2世)の命により、チルンハウスとベツトガーがヨーロッパ初の硬質磁器の焼成に成功、強王は1710年ドレスデン近郊のマイセンに王立磁器製作所を設立し、これが今日に続くマイセン窯の始まりです。強王は熱狂的な磁器コレクターで中国の磁器を151個手に入れるために騎兵600人を差し出したという逸話が残ります。「猿の楽団」最後の一体を手に入れるために巨額を投じた映画の主人公ウッツ男爵しかり、蒐集家を捉えて放さない魅力が白い磁器にはあるのでしょう。

このたびの展覧会は、マイセンの高級洋食器ではなく、映画の中でも重要なアイテムであったフィギュア、特に動物彫像に着目ご紹介するものです。アウグスト強王は権威の象徴として、磁器で飾り立てた「日本宮」の建設をめざし、そのメインに磁器によるメナージェリ(同じく権威の象徴として集められた動物たち、今日の動物園の原形)を発案、キルヒナー、ケンドラーという優れた成型師によって570点以上の動物や鳥の彫刻が制作され、宮廷に納められたそうです。強王の死により「日本宮」は完成を見ずして幻に終わりますが、マイセンにとって動物彫像は、その設立当初から重要なアイテムであったことがうかがえます。

ヨハン・ヨアヒム・ケンドラーとベーター・ライニック《猿の楽団》1820-1920年頃 個人蔵



1



2



3

図1: 不詳《スノーボール貼花装飾蓋付カナリア付センターピース》1820-1920年頃 個人蔵

図2: オットー・ビルツ《二頭のグレイハウンド》1910-23年頃 J's collection

図3: オーラフ・フィーバー《O.T.(無題)》2000年 神谷美術蔵

第一章で「神話と寓話の中の動物」たちを取り上げます。西洋美術には神話や寓話を主題にした作品が数多くありますが、絵画や彫刻のみならず工芸作品の中にも物語を巧みに視覚化しさまざまな寓意を背景にもつ像が作られました。女神や天使が手にする小道具や寄り添う動物たちが重要な意味を担っています。華麗な絵付けとともに細部まで目をこらしてご覧ください。第2章は「器に表された動物」として、マイセンを代表する「スノーボール」(小花彫刻)とともに表現された鳥獣です。小さい花がびっしりと器全面を埋め尽くす様や器に描かれる虫たちには好き嫌いがあるかもしれませんが、自然主義的な時代の傾向を見て取ることができ、1600年代にヨーロッパへもたらされ、愛玩されたカナリアが人気モチーフとして多用されます。第3章は「アール・ヌーヴォーの動物」、第4章は「マックス・エッサーの動物」と題し、「マイセン動物園展」珠玉の動物たちが勢揃い。有機的でなめらかな曲線、透明感のあるみずみずしい釉色にため息がこぼれそうです。愛らしいだけでなく、筋肉が盛り上がる躍動感に富んだ肢体の表現や厳しい眼光も見どころ。深い森を有するドイツでは今なお狩猟が行われており、マイセン彫像に猟犬が多いこともお国柄だと思います。

優れた成型師が原型を作り、多くの職人たちの手仕事で仕上げられるマイセンの伝統は今日まで連綿と続いています。当館では、そうした現代のマイセン工房の様子が垣間見られる映像や自由な発想で1点物を手がけたオーラフ・フィーバーの作品を紹介する特別陳列「ワンモア・マイセン」をクリスマス&新春のテーブルセッティング、室礼とともに楽しんでいただきます。美しいものに囲まれて心豊かに過ごす、そんな一時を大切にしたいと思います。

【特別展】「マイセン動物園展」(会期:2020年12月5日~2021年1月31日)

雪舟の里帰りに寄せて

八田 真理子(学芸員)

2020年は室町時代の画僧・雪舟等楊の生誕から600年、江戸時代の文人・浦上玉堂の没後200年にあたる。雪舟(1420-1506?)は総社市赤浜に、玉堂(1745-1820)は当館が建つ岡山市北区天神町にそれぞれ生まれた「岡山人」である。彼らの周年を記念して、当館では特別展「雪舟と玉堂一ふたりの里帰り」を開催する。本展は彼らの代表作を一堂に展示することで、岡山の生んだ水墨画家の真価を改めて知っていただく機会としたい。

実はこれまで当館では、玉堂に関する展示を定期的におこなってきた一方で、雪舟については少ない現存作品の多くが指定品で展示日数に限りがあるため、他館所蔵品を含めて雪舟に焦点を絞った展示をしたことがなかった。したがって今回は当館初の本格的な雪舟展として貴重な機会なのである。

ではいったい岡山での雪舟展がどれほどの意味をもつのか、ここで確認してみたい。しかしひとまず雪舟の基本事項を確認しておこう。雪舟は赤浜に生まれ、宝福寺(総社市)で修行したのち若くして上京し相国寺に入った。その後山口に移り、48歳からは足掛け3年明国に渡るなどして画技を磨いている。帰国後は一時大分に居を構えていたが、山口に戻り同地を活動拠点として制作に励んだようだ。没年と没地は諸説あるが、ふるさと岡山の重玄寺(井原市)で亡くなったとも伝わる。

このように雪舟の画業は京都や山口、大分での活動が中心で、岡山における足跡は希薄である。しかし、岡山においては早くから地元出身の巨匠として重視されてきた。1680年代頃、笠岡市生まれの俳人在田軒道貞は『吉備物語』^{*1}に雪舟伝を記している。この伝記では注目すべき個所が二点ある。第一には備中のなかでも不明だった具体的な出生地を「赤浜」と明記していること。第二には「涙のネズミ」の逸話である。これは宝福寺の小坊主時代、柱に縛られた雪舟が流した涙を足でなぞり、動き出すほどに生彩なネズミの絵を描いたという、現在でも有名なエピソードである。初出かどうかは不明だが^{*2}、江戸時代初期の岡山でも既に「岡山生まれの画聖雪舟」が強く意識されていたようだ。

明治時代に入ると「自我をもった近代的画家」という雪舟イメージが強まったこともあり、東京を中心に雪舟研究が盛り上がりを見せていたが、これにやや遅れて行政組織としての岡山県にも雪舟を県の偉人として示そうという動きが確認できる。明治43(1910)年、岡山県が発行した『岡山県人物伝』には「涙のネズミ」を含めた岡山での雪舟伝説が収録され、同年に行われた陸軍特別大演習の記録アルバム^{*3}には「雪舟筆水墨達磨慧可ノ図」^{*4}が掲載されている。同図所蔵者の星島謹一郎は岡山県会議員や貴族院議員を務めた名士であった。演習は明治天皇の統監で行われたので、同作は御覧に供されたとみられる。ここにも岡山県が雪舟の故郷としての意識を強めていたことが看取される。

時は流れ、ようやく岡山初の本格的な「雪舟展」が開催されたのは昭和49(1974)年、岡山美術館(現在の林原美術館)においてのことであった。同展図録巻頭の大熊立治館長(当時)による次の言葉は印象深い。「(前略)「雪舟」の名は、(中略)ねずみの伝説によって、岡山人にはまことに親しいものとなり、雪舟をわがものとする思いに満たされていますが、さてその人となりや芸術の偉大さについては必ずしもよく知られているとはいえません。」^{*5}

展示では「山水長巻」として知られる門外不出の国宝《四季山水図巻》(毛利博物館蔵、図1)が巻頭から巻末まですべて展示されたといい、「岡山で雪舟の名品を紹介したい」という関係者の熱意が窺える。「山水長巻」の展示期間は一週間だったようだが、国宝《天橋立図》(京都国立博物館蔵)をはじめとする雪舟代表作が入れ替わりながら、重要文化財も数多く含めた38点で岡山の鑑賞者を迎えていたようだ。山陽新聞には開催初日のようすを伝える記事が掲載されており、写真(図2)には「山水長巻」に見入る来場者の姿が捉えられている。

さて、このたびの特別展では、岡山美術館「雪舟展」から47年ぶりに「山水長巻」が“里帰り”する。16メートルにおよぶ本作は山口にいた晩年の雪舟によって文明18(1486)年に大内氏へ献上するため描かれたもので、雪舟作品のなかでもスケールがことさら大きい。場面は深山幽谷から始まり、やがて船や家屋を伴う人の営みが現れる。動きのある人物の造形、樹木や岩の力強い筆致など見どころは尽きないが、透き通るような色彩も魅力的だ。本作は間違いなく日本水墨画における傑作のひとつだが、水墨の語に想起されるモノクロームだけの世界ではない。四季の移ろいと時間の刻々たる変化の表現が、墨色も含めたとりどりの色とその濃淡によって一層の深みを増しているのである。やはりこの魅力は本物を目の前にして味わっていただくしかない。今回は毛利博物館のご好意により、全会期で全巻をご覧いただける運びとなった。ぜひとも雪舟の故郷岡山で、「山水長巻」や名品の数々を体感してほしい。



図2:岡山美術館開催「雪舟展」開幕記事掲載写真(1974年10月2日付山陽新聞朝刊) 山陽新聞社提供

- *1: 在田軒道貞(吉岡信元)『増補吉備物語』(野田実編『吉備文庫』三輯、山陽新報社、1930年所収)
- *2: 同じころ広島藩の儒医であった黒川道祐が『遠碧軒記』に同様の記述を残しており、同書の記述を基に狩野永納『本朝画史』が記され、版本として普及した。
- *3: 岡山県『明治四十三年陸軍特別大演習行幸記念写真帖』明治44(1911)年
- *4: 同図は雪舟《慧可断臂図》(国宝、愛知県齊年寺蔵)と同じく面壁達磨と慧可を描いたものだが、(伝)閻次平《慧可断臂図》(クリーヴランド美術館)の模写とみられる。クリーヴランド美術館本は当時日本にあった(『唐宋元明名画大観』(大塚工芸社、1929年)に井上辰九郎所蔵として掲載される)。
- *5: 続く松下隆章京都国立博物館館長(当時)の「はじめに」では、雪舟とともに浦上玉堂が挙げられ「岡山県はこの二人の、日本絵画史上不滅の作家を持つことを誇りとしてよいだろう」と記されている。

【特別展】「雪舟と玉堂一ふたりの里帰り」(2021年2月10日～3月14日)



図1:国宝 雪舟等楊《四季山水図巻(山水長巻)》(部分) 1486年 毛利博物館

新収蔵品紹介

File 18

坂田一男のフランス留学時代の水彩画
橋村 直樹(学芸員)



坂田一男《タイトル不詳》1929年 グワッシュ、紙

昨年度に開催した特別展「坂田一男 捲土重来」を契機として、坂田一男の親族の方々から248件にもものぼる坂田作品と関連資料が当館に寄贈された。ここでは、それらの中からフランス留学時代に描かれた興味深い2点の水彩画を紹介したい。

坂田一男は、1921年から33年までのフランス留学時代、アカデミー・モデルヌのフェルナン・レジェやアメデオ・オザンファン、さらには彼らの身近にいたル・コルビュジエといった一線級の前衛画家たちと親しく交流しながら、フォーヴィスムにはじまり、キュビズムを経てピュリスム、さらにはほぼ純粋な抽象絵画へと展開していった。坂田が20世紀初頭の主要な前衛的芸術運動を本質的に理解して血肉化していたことは、当館所蔵の《キュビズム的人物像》(1925)や《坐る女Ⅲ》(1926)といった留学時代の油彩画が例証している。

ここで紹介する2点の水彩画は、そうしたキュビズムやピュリスムによる留学時代の油彩画とは趣を異にする。いずれもほぼハガキ大に裁断されたスケッチ用紙にグワッシュで描かれ、タイトルは不明なもの、それぞれ画面左上と左下に記されたサインにある年紀から、フランス留学時代後半の1929年に描かれたことがわかる。いずれにおいても、曲がり捩じれた筒状の物体が、大きく裂けて赤色や黒色の内側を覗かせながら、グレーを基調として塗り重ねられた地となる画面に漂っている。中央のモチーフは、破れた血管や裂けた植物の茎をクローズアップして抽象化したもののようにも、壊れて裂けた金属製のパイプを抽象化したものようにも見える。幾何学的な形に還元するキュビズムとも幾何学的な秩序で構成されるピュリスムとも異なり、不規則な曲線を基調とする有機的形による非幾何学的な抽象絵画といえるだろう。

自然物を思わせる有機的で不定形な形によるこうした作品を坂田が1929年に描いたことは、1920年代後半以降、彼の身近にいたオザンファンが、科学や機械の発展によって接近可能となった自然に新たな秩序を見出して芸術作品に生かそうとしたり、レジェとル・コルビュジエが、貝殻や小石、木片や動物の骨といった有機的形の自然物を集めてそれらを絵画に取り入れようとしたりした新たな動向*とおそらく無関係ではないだろう。これら新収蔵の2点の水彩画は、機械の美学から離れて自然の事物に新たな芸術的造形の可能性を見出そうとしたレジェらの問題意識を、坂田も共通して持っていたことを示す、小品ながらも極めて重要な作品といえるのである。

*1920年代後半以降の、とりわけ1930年代前半のレジェらの自然物への関心については次に詳しい。山本友紀「モダン・アートと「自然」の表象 / 1930年代フランスにおける抽象芸術に関する一考察」『芸術工学 2014』2014年



坂田一男《タイトル不詳》1929年 グワッシュ、紙

展覧会スケジュール

12月
December

11月8日|日| - 12月20日|日|

【岡山の美術展】
第10回 I氏賞受賞作家展
金孝妍・小林正秀・中原幸治・吉行鮎子

【岡山の美術展】
もっと伝統工芸 木工芸 伝統工芸前夜

12月5日|土| - 2021年1月31日|日|

【特別展】マイセン動物園展

ヨーロッパで初めて硬質磁器の製造に成功したマイセン窯は、設立以来300年以上にわたり西洋磁器のトップブランドとして高い評価を得ています。本展では、最高級の芸術性と品質を誇るマイセンの作品群から、動物をモチーフにした愛らしく躍動感に富んだ作品をご紹介します。

前期:12月13日|日| - 12月27日|日|

後期:2021年1月10日|日| - 1月24日|日|

【教育普及展】

みんなの参観日

「図工の時間・美術の時間—子どもの学び—」

みんなの参観日は、「図工の時間・美術の時間」の中で大切にされている子どもの思いや主題、そして先生の支援や子ども同士の関わりを切り口とした「子どもの学び」を美術館に展示して、みんながそれを参観する場です。2回目となる今年度の参加校は、倉敷市立庄小学校、同二万小学校、新見市立西方小学校、和気町立和気中学校、瀬戸内市立牛窓中学校、同邑久中学校、同長船中学校、玉野市立宇野中学校、倉敷市立南中学校、津山市立津山東中学校です。

1月
January

2月
February

2021年2月10日|水| - 3月14日|日|

【特別展】

雪舟と玉堂—ふたりの里帰り

室町時代の総社市に生まれ、明時代の中国で足掛け三年を過ごしてから山口を中心に活躍した画僧・雪舟等楊。江戸時代の岡山市に生まれ、脱藩して琴と画を愛した旅する文人・浦上玉堂。それぞれ前衛的な水墨画を描き、美術史上に独特の存在感を放つ巨匠です。故郷・岡山で開催する本展では、国宝を含む傑作の数々によって彼らの生涯とともに画業の学びや創意工夫を解き明かしながら、時を超えてみずみずしい水墨の魅力に迫ります。

*最新の展覧会情報やその他開催予定のイベントについては岡山県立美術館HPをご確認ください。
<https://okayama-kenbi.info>

12月5日|土| 13:30-15:00

記念講演会 「動物表現を通して知る
マイセン磁器の様式」

講師 岩井美恵子氏(パナソニック汐留美術館学芸員)
会場 2階ホール(当日先着100名) ※要観覧券

12月25日|金| 14:00- / 18:00- (各回30分程度)

コンサート 「クリスマスミュージアム
コンサート」

演者 上月真子氏・大森由理氏(オーボエ奏者)
会場 地下1階展示室内 ※要観覧券

2月13日|土| 13:30-15:00

記念講演会 「わかってあげよう雪舟と玉堂」

講師 島尾新氏(学習院大学教授)
会場 2階ホール(当日先着180名) ※事前申込制、要観覧券
申込詳細や他イベント情報は展覧会特設サイトをご覧ください。



収蔵品の紹介
Vol. 2

浦上玉堂
《山澗読易図》

江戸時代後期
(19世紀初期)
紙本墨画淡彩
168.1×92.4cm

山と澗の間、陰陽の二元をもって天地万象を説く『易経』を読む、という意の題である。画面下方には書物を手にした文人がごく小さく描き込まれる。その上部に広がる重厚な山水景は彼を取り巻く空間であると同時に、彼が画中で没頭する易の思想が投影された空想の景物とみてもよいだろう。(八田)

玉堂さん

守安 収

20年来、浦上玉堂(1745-1820)に取り組んでいます。はるか昔の大学生の頃、恩師脇田秀太郎先生が彼のことをいくら力説しても、私には「変人の画家」としか思えませんでした。でも、学ぶほどに「この人は？」と関心が募り、いつの間にかライフワークとなりました。まだ道半ばなのですが…。▼50歳で武士としての安定した生活を脱藩という行為によって捨て去り、岡山を出奔して諸国を遍歴し、76歳で生を閉じるまで文人として琴・詩・書・画に遊びました。玉堂は優れた音楽家であり、詩人であり、隸書や篆書にも通じた書家であり、山水しか描かない水墨画家でした。玉堂自身は「琴士」を本分としていたものの、現代において最も評価が高いのは画家としての彼です。ただし、本人は文人としての理想郷をひたすら描くだけで、そこに社会性を表現するようなことはありません。ならば芸術的な才に恵まれていても世の中のことに疎いのか、人とコミュニケーションをとるのが下手なのかというところを決してそうではなく、能吏であり、諸学に秀でた博学の士であり、合理的な判断ができ、旅先でも歓迎される人物でした。64歳の彼が金沢を訪れた時の様子を町奉行が書き遺しています。白髪のお髯を生やした老人で杖も突かずに達者に歩き、眼鏡いらずで細かい文字も大丈夫、返り点のない中国の本もすらすら読める。詩も画も雅風があり、七絃琴を演奏してもお金を取るわけではなく、各地を歩いているから話が面白い、といった感じです。どうやって生計を立てていたのかは判然としませんが、老人仲間として実にあらまほしき存在です。2月10日から雪舟さんと一緒に並びます。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 岡山後楽園バス「岡山県立美術館」下車すぐ
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ
開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)
休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

※一部の公共交通機関では新型コロナウイルス感染拡大に伴い、一部運休している場合があります。ご利用の際は事前にご確認くださいませようをお願いいたします。

編集後記

中西ひかる

この館ニュースが皆様のお手元に届く時には「マイセン動物園展」が始まっている頃でしょうか。実は、この展覧会の会期中には、今年で2回目を迎える「みんなの参観日」が12月13日からの前期、来年1月10日からの後期と、屋内広場で開催されます。それぞれの会期で展示に参加する学校も、内容も変わりますので、ご来館の際はマイセン動物園展と合わせてお楽しみください。そして2月からは、今号でも掲載されました「雪舟と玉堂一ふたりの里帰り」も開催されますので、この冬もぜひ岡山県立美術館にご注目いただけたらと思います。